

令和6年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 中井 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、6年生を対象として、令和6年4月18日（木）に、「教科（国語、算数）に関する調査」、文部科学省が指定した日（4月10日から4月30日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査（国語、算数）

教科に関する調査（国語、算数）

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○ 学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査（国語、算数）の結果

本年度の結果	国語		算数	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	9.3	66	9.6	60
全国	9.5	68	10.1	63

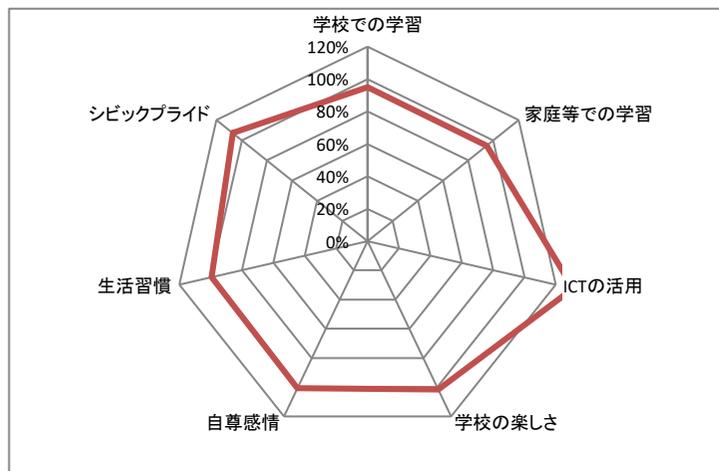
(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	全体的に、全国平均を上回っている。基礎的な知識・技能を問う問題、思考・判断・表現を問う問題ともに、全国平均を上回るものが多いが、一部、漢字の書き取り問題では、全国平均を2ポイント下回っている。また、記述式の問題や人物像を想像する問題は他の問題と比べ、正答率がやや下がっている。	全国平均正答率との比較
			上回っている

〇〇	よくできた問題	情報と情報との関連付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができるかどうかをみる問題の正答率は、他の問題よりも全国平均を大きく上回っている。
	努力が必要な問題	人物像を具体的に想像することができるかどうかをみる問題の正答率は、全国平均を3ポイント下回った。また、正しく漢字を使うことができるかどうかをみる問題は、無回答率が高かった。

算数	全体的な傾向や特徴など	全体的に、全国平均を上回っている。思考・判断・表現を問う問題に関しては、7問のうち6問で正答率が全国平均を上回っている。ただし、全国平均で正答率が低い問題は、上回っているものの自校の正答率も低かった。また、基礎的な知識・技能を問う問題は、正答率が高いものの、全国平均を下回る問題もあった。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	小数の除法、折れ線グラフから必要な数値を読み取り条件にあてはめることができるかどうかをみる問題、問題場面の数量の関係を捉え式に表すことができるかどうかをみる問題の正答率は全国平均を8ポイントほど上回っている。	
	努力が必要な問題	円グラフの特徴を理解し、割合を読み取ることができるかどうかをみる問題の正答率は低くないものの、全国平均と比べると7ポイント下回った。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



質問調査の結果分析	
<ul style="list-style-type: none"> ・ICT活用に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、全国平均を大きく上回っている。児童がタブレット等を活用しやすい学習の工夫がされていると考えられる。 ・学校の楽しさに関わる問い「学校に行くのは楽しいと思う」「友達関係に満足している」に肯定的な回答をした児童の割合は、全国平均を上回っていた。 ・「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習に取り組んでいた」に肯定的な回答をした児童の割合は全国平均を上回ったが、授業の中での主体性について問われた質問に関しては全国平均を下回っていた。どの学習においても、児童が問いをもち、主体的に課題解決できるような工夫を行う必要がある。 ・休みの日に家庭学習を1時間以上している児童の割合は、全国平均よりも6ポイント下回っていた。 	

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

- ・授業でのICT活用は積極的に取り組んでいる。今後は、児童が自分の課題に応じて調べたり、情報を共有したり、共同編集したりできるようになるなど、より一層、個に応じた活用の仕方ができるように指導の工夫をしていく。
- ・算数も国語も問題場面をイメージできずに、題意に合った解答ができていなかった。今後は、求められていることを理解し必要な情報を正しく選んだり説明したりできるようになることや、視点を切り替えて考えることができるようになることを目指すため、様々な形での交流活動を工夫していく。

② 家庭生活習慣等に関する取組

- ・家庭学習に対して肯定的な回答をしたポイントが低いことは、学校での学習に対する主体性の低さと関連していると考えられる。そこで学校では、「知りたい」「深めたい」という意欲を育て、それが家庭学習へとつながるような取組を行っていかねばならない。